

学習1 古文の読み方を整える

考え方と確認例

物語の入口を読む

『竹取物語』は作者未詳の、平安時代に成立した物語です。この教材では、翁が子を見つける場面から育てる場面までを読みます。あらすじを知っていても、後の場面の知識を先回りして答えに入れず、いま掲載されている文章を根拠にしましょう。

音と意味は別々に確かめる

「現代仮名遣いに直す」は、言葉の意味ではなく表記を直す指示です。例は「けふ→きょう」「こゑ→こえ」。一方、「意味を答える」では、文中でどのような内容を表すかを現代の言葉で書きます。まず設問の指示に丸を付けると混同を防げます。

同じ形でも意味が違う

古語には、現在の日本語と同じように見えて意味が違う言葉があります。「あやし」は、不思議だという場合も、身分が低いという場合もあります。辞書の意味を一つ当てはめる前に、人物が何を見て、どう行動したかを合わせて読みましょう。

短く区切って読む

まず句点まで読み、「だれが」「何を」「どうした」を一組にします。「～て」が続くところは動作を分けると整理できます。作例「人、門を出でて、山に行く」は、同じ人が門を出る→山に行く、という二つの動作です。

語注の使い方

人名・昔の道具・儀式の語注は、場面を想像するための助けです。語注を使って内容をつなぎ、解答では設問が求める範囲に絞ります。初めからすべてを現代語に置き換えようとせず、動作と人物の関係を先につかみましょう。

学習2 人物・会話・時間をつなぐ

考え方と確認例

主語は動作ごとに確認する

古文では主語がしばしば省略されます。前に出た人物名を手がかりにしながら、「見る人」と「見られる人」、「育てる人」と「育てられる人」を区別します。途中で人物が変わる可能性もあるので、すべてを同じ主語にはしません。

会話の内と外を分ける

「～いふやう」の後に続くかぎっこは、その人物の言葉です。会話内の「われ」は話し手を指します。かぎっこが閉じた後には語り手の説明が戻ります。人物の考えを問う問題では会話、実際の行動を問う問題では会話の前後も見ます。

敬語から大切に思う相手を知る

敬語は、だれの動作を高めているかを確認めます。作例「客、来給ふ」なら、来る人である客を高めています。ただし、敬語があるだけで具体的な身分や血縁関係がすべて分かるわけではありません。本文にないことは付け加えません。

時間を示す言葉を目印にする

「後」「ほどに」「かくて」などに注目し、出来事を矢印で並べます。「後」は前後関係、「ほどに」はある時間の経過を示す手がかりです。前後して起きた二つのことでも、本文に説明がなければ直接の原因だと決め付けないようにします。

理由と結果を混ぜない

「なぜ～したか」には、行動そのものを言い直すだけでは答えられません。その判断につながる事実や言葉を探し、「～ので」「～から」で結びます。人物がそう考えた理由と、語り手が伝える事実を分けると、説明が明確になります。

学習3 根拠のある短い答案を書く

考え方と確認例

抜き出しは原文どおり

抜き出しでは、現代仮名遣いに直したり、言葉を補ったりしません。指定された段落・字数・始まりと終わりを確認します。「説明しなさい」なら、逆に本文を写すだけでなく、意味が伝わる現代の言葉に直す必要があります。

現代語訳は三つの順で

①意味の異なる古語を直す、②省略された主語や目的語を必要な分だけ補う、③否定・理由・時間の流れを保って自然な文にする、の順です。訳し終えたら原文の各部分と対応させ、勝手に加えた内容や抜けがないかを点検します。

変化の前と後をそろえる

人物の暮らしや気持ちが変わる問題では、「前は何だったか」「後はどうなったか」「何がきっかけか」をメモします。「幸せになった」のような大きすぎる言葉だけで済ませず、本文に描かれた変化を具体的に書きましょう。

不思議さも本文で説明する

物語の不思議さを問われたら、「不思議だから」と答えるのではなく、現実では起こりにくい具体的な描写を示します。一方、登場人物の魔法や願いなど、書かれていない仕組みを考え出す必要はありません。

練習から確認テストへ

Aは語句と場面、Bは会話と関係、Cは成長と表現を練習します。Dは8問100点の確認テストです。解答後に全文訳と解説を読み、誤りを「読み・語句」「人物」「根拠」「記述条件」に分け、間違えた種類だけもう一度解き直しましょう。

資料と使い方

出典と表記について

本文・訳・設問について

古典原文は保護期間満了の作品を使用。現代語訳・語注・学習の手引き・設問・解答解説は本教材のために独自作成。原文の漢字・仮名・句読点は、教科書によって異なる場合があります。

中学1・2年生向け。竹取物語の基礎と復習に使えます。学校や教科書によって扱う作品や順序は異なります。

字数は句読点・かぎカッコ・小さい仮名も各1字と数えます。抜き出しは本文の表記どおりに書き、指定がない限り前後の句読点・かぎカッコは含めません。確認テストの各問の得点は0点を下限とし、空欄は0点です。

竹取物語（国民文庫）原文

[https://ja.wikisource.org/wiki/竹取物語_\(国民文庫\)](https://ja.wikisource.org/wiki/竹取物語_(国民文庫))

出典確認日 2026年10月10日。出典の現代語訳・解説・設問の転載ではありません。